

# 近世後期上方語と名古屋方言をめぐる

——形容詞「どえらい」を中心に——

増井典夫

## 一・はじめに

方言区画論による分類では、名古屋方言や岐阜方言は東日本方言と位置付けられ、近畿の方言とはある程度隔たりがある、とされる。確かにアクセント等の違いは大きい。しかし、それ以外の面、例えば語彙面等では、名古屋の言葉と上方の言葉はかなり近い面もあるのではないか。

明治時代以降、共通語においても一般的に用いられている「えらい」という語は、関西方言では、共通語よりも広い用法が見られ、また多く用いられる、というように説明されることも多いものである。その「えらい」に強調の接頭辞「ど」のついた形である形容詞「どえらい」は、特に大阪方言において多用される語、と一般的には説明されることの多いものである。

しかし、「えらい」と「どえらい」は名古屋では、見方によっては関西以上に広く用いられているとも言えるものである。本稿では、特に「どえらい」という語について近世後期上方語と名古屋方言で見ながら考察し、そこから現代における名古屋方言にも思いを広げてみたいと考えるものである〔注1〕。

近世後期語にみる「どえらい」をめぐって

まず、ここに取り上げる「えらい」という形容詞だが、「程度のはなはだしさ」を表し、連用形の形で形容詞・形容動詞などを修飾可能な形容詞類の一つとして位置付けられるものである。近世後期においては「えらい」の他「きつい」「いかい」といった語が一般に用いられるものである。

これまで「えらい」「きつい」「いかい」といった語の、寛政期以前の使用状況〔注2〕や、江戸洒落本における享和期以降での使用状況などを中心に拙稿では検討してきた〔注3〕。

「えらい」「きつい」「いかい」の三語のうちでは江戸では「きつい」が多用され、「えらい」の使用は少ないのに対し、上方では「えらい」が最も多く使用される。

名古屋において、上方語に見られるのと同様に「えらい」の使用が多く見られる。次に挙げるのは洒落本の例である（巻数、頁数は「洒落本大成」による。以下、洒落本作品において断りを入れていない場合は同様）。（用例の引用において、ルビは適宜省略した）。

- 居……………けふはえろうさむいでやないか（「囲多好鬻」、寛政12（1800）年、18巻、305頁）
- おかる……………でうでやえらふつもるなんし（「女楽巻」、寛政12年、18巻、338頁）
- 作……………どふでやえらふにぎやかすの（「軽世界四十八手」、寛政12年、18巻、352頁）

名古屋における話し言葉の資料として、近世までさかのほった時にまとまった形で見られるものは洒落本である。その洒落本において名古屋方言らしさの出た口語資料として扱えるものが、上に挙げた寛政12年頃からのものである。上の例でも断定の助動詞「でや」の使用など、名古屋らしさがうかがえるものである。そこにおいて「ゑらい」の使用は、このように広く見られるものである。なお、「ゑらい」の使用は「囲多好鬢」で計6例、「女楽巻」で6例、「軽世界四十手」で7例見られる〔注4〕。

「きつい」の使用が多い江戸語に対し、「ゑらい」という語の使用という面では名古屋方言は、江戸語よりも上方語の特徴に近いものを示すと言えよう。

上方洒落本では、化政期以降の作品の中に「どゑらい」「どぎつい」といった、形容詞に接頭辞「ど」のついた例が見られるようになる。

「どぎつい」の例は次のようなもので、京都の洒落本における例である。

○昔も今も金がいはずる美男子脚元見られてぐつと罵られ苛こふ心こころにあたりしが誹名いれなさへ負惜と付程つひらの古気こけおしみおしみ（「当世廓中掃除」、文化4（1807）年、24巻、319頁）

さて、ここでは特に、近世における「どえらい」という語の使用状況について考える。

前田勇氏の「上方語源辞典」（昭40、東京堂出版）で「どえらい」の項を見ると、次のように記述されている。

〔語源〕ドは、意味を強めるために冠した接頭語。皇都午睡すいすい、「大坂でどえらい、京で仰山、江戸では大騒たいさう」。「でかいをどえらい」（上は京、下は大阪）とあるように、近世には専ら大阪で用いたが、今は京阪共通。

この記述中の「近世には専ら大阪で用いた」という点はどうだろうか。確かに、「皇都午睡」の記述だけ見ると「そうかな」とは思わせる。また、「新撰大阪詞大全」（天保12・1841年）にも接頭辞の「ど」についての記述がある。次のようなものである。

どといふことば、すへての發語なりたとへは きちがいを どきちがい ぬす人を どぬすひと こじきを どこじき ひとつこひといふを どびつこひ というたぐひいくらもあるへし余はおしてしるへし（『国語学大系 方言』二）

「へどえらい」も「ドがつく言葉の一つ」である。この「新撰大阪詞大全」に取り上げられている言葉は大阪に特徴的に見られるものである」といったような判断も有って先の、「近世には専ら大阪で用いた」との記述につながったのであろうか。

しかし、もう少し他の用例を見てみて、「近世には専ら大阪で用いた」という記述が妥当なものかどうか、考察してみることにする。

例えば、十返舎一九の『東海道中膝栗毛』である。この作品では、文化4年に刊行されている第六編の上の部分、「伏見を経て京に入る」において「どゑらい」が二例ほど見られる。次のようなものである。

a いんきよ「イヤもふおたがひに、どゑらいめにあふたこつちや。（中村幸彦校注『日本古典文学全集』、小学館、360頁）

b 大坂もの、つれ……そんなことより、こちやどゑらいめにあふたわいの。（同、367頁）

bでの「どえらい」の使用は大阪者であるが、aの「いんきよ」は大阪に向かおうとする京都者である。「どえらい」は「大阪者のみ」と考えられていたようには思われない。一九は漠然と、「どえらい」は上方者が使う言葉とだけ考えていたのではないかと思われる〔注5〕。

別の用例を見てみよう。次に挙げるのは上方洒落本に見られる「どえらい」の用例である。

①白髪三千丈とは強苛じまらひ李白ていぱうが寓詞よまごよふ思ても見たがよい何程ながいらがじやとて三千丈とは凡ざんの長さが八十町  
(「当世廓中掃除」、24巻、316頁)

②おれもよつほど見性したであらふがなどはどえらうめほれひ自うめほれ負うめほれ久うめほれしいものじやが南柯の一夢(同、332頁)

③半……たつた今どゑららひことを見まして。一かう気色きしきが悪わるひ(「老楼志」、天保3(1832)年、28巻、34  
8頁)

④半……隣家となりの楼主れいしゅが。どゑららひ仕業しごふの真最中まごちゆうでムり升。(同、348頁)

⑤意地いぢわるのわるさ好このが襖隣あはれの闔中かちゆうの客其耳元きみみもとで太鞍たごをどゑらろう叩立たた相客あひやくむかつきの余り終に喧嘩けんかと(「客野穴」、  
天保11年、29巻、193頁)

「どゑらい」の用例は、上方洒落本で見られたのは上の5例ほどであったが、上方洒落本で「どゑらい」の用例が見られる早い例は、先の「東海道中膝栗毛」六編が刊行された、同じ文化4年の作品である。「当世廓中掃除」のものということになる。

このうち、用例⑤が見られる「客野穴」は大阪の作品であるが、用例①～②が見られる「当世廓中掃除」、③～④が見られる「老楼志」の二作は共に京都の作品であり、実際に京都でも「どゑらい」はかなり広く用いられていたものと思われる。

また、「どゑらい」が京阪のみに限られていた訳でもない。

近世後期の名古屋において「どゑらい」は、一般的に使用されていたものと思われるものである。名古屋板の洒落本での用例を、次に挙げる。

⑥喜……銭式文ながら畳のすき間より板のあいだをくゞつてゆきがたしれす世にけり コリヤどゑらいめにあはしや

アがつたいましい（「南駅夜光珠」、文化4年、24巻、289頁）

⑦八……何と童公どゑらいめにあふた酒の外二拾匁油五勺か五匁（「三狂人」、文政13（1830）年、28巻、183頁）

なお、⑥の用例の話者「喜三」は、例えば次のように文の言い切りに「でや」を使うなど、名古屋者らしい話ぶりの特徴がうかがえる人物である。

○そこになにしていやるはどふでや（24巻、287頁）

○よほどこアない九ツすぎでや（同、287頁）

○おまへはよつほと学者でや（同、288頁）

⑦の話者「八郎平」も、次のように名古屋者らしい話ぶりがかがえる人物であるが、「江戸好きの男」という設定でもあり、多少江戸語的な面もうかがえる話ぶりである。

○おめい子供のときは角蔵といふたで。なる駒やたねきのつよい馬だね（28巻、179頁）

○大須か清寿院がい。けふ大須へ参詣したら（同、179頁）

○羽織かみじかくなつた其替り二日が少し長ふなつたいせ丁最早大津丁たね（同、180頁）

「どゑらい」が見られる京都の洒落本「当世廓中掃除」は文化4年（1807年）の作品だが、同じく「どゑらい」が見られる名古屋の洒落本「南駅夜光珠」も同じ文化4年の作品であり、「どゑらい」は上方と名古屋で同じ頃から使用が認められるものであることがわかる。

さて、「近世上方語辞典」（昭39、東京堂出版）には用例として「けいせい忍術池」という作品（歌舞伎台帳）のものが挙げられている。（『日本国語大辞典』も同じ例を初出例として出している）。

○茶臼山の紅葉狩か、浮む瀬よりはどゑらいく

なお、この「けいせい忍術池」は活字本としては、『日本戯曲全集（第5巻、並木五瓶時代狂言集）』（昭5、春陽堂刊）

でのみ出ている。前記箇所では「どえらいく」の部分「どえらいどえらい」(同書171頁)となっているほかは同じである。

それに対し、写本(国会図書館本)では同箇所は次のようになっていて、表記に微妙な違いがある。

○茶白山の紅葉狩かうかむせよりハとゑらひく

さて、この「けいせい忍術池」は『近世上方語辞典』では天明六年(1786年)の作とされている。これが確かならば「どえらい」の最も早い例が天明六年の大阪ということになる。しかし、写本(国会図書館本)には奥書等は何も無い。このような歌舞伎台帳には何も記されていないのが普通なのかもしれないが、私がみたところ刊年などについては何もわからなかった。なお、『国書総目録』を見ると、写本のうち「松竹大谷図書館本」のみ、書写年が記されていることがわかる。実際に「松竹大谷図書館本」を調べた所、「文政二卯三」と奥書があるもので、「文政2年4月道頓堀角の芝居上演」時のものであった。書写年のわかる写本は、初演時より33年後のもののみということになる。「どえらい」の当該例はこの写本には見られない。

確かに、この「けいせい忍術池」という作品の初演は、天明六年で間違いないようであるが、「どえらい」の見られる台帳が天明六年の初演時のものであると断定出来る根拠はないように思われる。「どえらい」の初出例としてこの例を扱うには問題が残るものであろう。

なお、他の辞典類の記述として、例えば『大阪ことば事典』(牧村史陽編、昭54年)で「どえらい」の項を見ると、これは浄瑠璃台本である「源平布引滝」の例を用例として挙げ、寛延年間のものとしている。しかし、ここで挙げられている例は「江戸時代の末期、増補書替えられた」(『日本古典文学大系52』巻の解説へ10頁)による)「松波琵琶の段」



の中に見られるものである。このように歌舞伎台帳等からの用例を見る時には慎重な態度が必要である。

歌舞伎台本の資料性等についていろいろ扱いが難しいところが多いが、今後さらに検討していきたいと考えている。

さて、右に述べてきた「けいせい忍術池」の例が天明六年のものかどうかはさておき、「どえらい」の使用は大阪が早かった可能性はある。

しかし、先の①～④の京都の洒落本における例、それに⑥～⑦の名古屋の洒落本の例を見ると、前田氏の「近世には専ら大阪で用いた」という記述は少し適切でないように思われる。「どえらい」は現代だけでなく近世においても、大阪だけでなく京都でも、さらには上方だけでなく名古屋でも使用が認められるものであったのである。

### 三・「ど」の方言分布について

「ど」という接頭辞は、「ど真ん中」「どぎつい」といった、全国共通語の使い方と見ていいかと思われる用法の他にも現代では、関西だけでなく名古屋でも、例えば「どたわけ」「ど素人」といった、「ののしる気持ちを込めた」ような言葉の使い方など、日常よく使われるものである。

名古屋洒落本で見ても、次のような例が見られる。

○はめ……くつとゑい男のつもりでこんな事をせるはなんしどずかん料理是く其どずかんといふは唐崎や一松さの事であるふがや（「駅客娼せん」、文化2年、23巻、215頁）

ここでの「どずかん」は「好かん」に「ど」がついたもので、「大きらい」といった意味合いだが、このような「ど

のついた例が近世後期の名古屋において見られ、上方だけでなく名古屋でも一般的に使用されるものになっていた様子がうかがわれる。この点について芥子川律治氏は、「江戸時代の名古屋方言語の研究」(『名古屋方言の研究』所収、昭46、泰文堂)の中で、

名詞・形容詞に接尾語「ど」をつけて、相手を罵ることがこの時代から特に著しくなる。「どたわけ」「どめくら」等。  
(同書、491頁)

と述べている。「接尾」は「接頭」の誤りであろう。

現代においては、共通語的用法だけでなく方言として見ても、山口幸洋氏が、

どの方言としての分布は、上方を中心に東は東北岩手、西は九州熊本までかなり広い「中央連続型」である。(『東海の方言散策』269頁、中日新聞本社、1992年)

と記述しているように、「ど」は日本全国で広く見られるものである。『日本方言大辞典』(小学館、1989年)を見る  
と、例えば、

○岩手県気仙郡「どぐろし(毒々しく黒い)

○福岡市「どびくい(低く)」

といったような例で日本各地のものが挙げられている。

現代では「ど真ん中」といった共通語的用法だけでなく、マイナスの意味の強調のような用法でも「ど」は、関西だけのものではなく全国的なものになっていると思われるし、また、近世後期においても、そのような「ど」の用法を含めて「ど」は上方の範囲にとどまるものではなくなっていたことがわかるものである。

#### 四・「ど」の意味内容と名古屋の「デラ」

さて、この「ど」の意味内容についてであるが、先に挙げた近世後期の名古屋方言の例を見ても、「マイナスの方向の強調語」と見なされている面が強いようである。現代での各地の方言でも同様の意味・用法のものとなっている傾向が強いかと思われる。

しかし、近世前期での「ど」の使われ方などを見ると、元々は「ど」の強調は中立的で、必ずしもマイナスの方向の強調とは限らなかつたとの指摘が道行朋臣氏によりなされている（注6）。氏の指摘通り、「ど」による強調は、元々は中立的なもので、それがマイナスの意味合いの強調の方向に用法が片寄っていった、というようにまとめられるものがある。

「どえらい」から「ど」を取った「えらい」自体、元々その意味用法は、程度の強調で中立的に用いられるもので、それが共通語としてはプラスの「大した、優れた」といった意味合いに特定化して用いられるようになったものである。一方、関西や名古屋ではプラス方向の共通語的用法のほか、マイナスの「苦しい、つらい」といった意味合いも持つようになったものである（注7）。

さて、「どえらい」という語もよく名古屋で以前からずっと使われてきたと思われるものであるが、現在ではほかに強調の程度修飾の用法として「デラ」というような形で使われるものがある。「とてもおいしい」という意味で「デラうめあ」というように使うものだが、これは「どえらい」の変化した形と言われている。正確には「どえらい」の語幹部分「ドエラ」の変化した形が「デラ」ではないかと思われる。

現代の「ど」はマイナス方向の意味合いの強調に使われることが多いのだが、前記の名古屋の「デラ」は、「デラウメア」のように、強調の意味でプラス方向の意味合いにも用いられ、その用法は中立的だとまとめられるものである。この中立的ということとは、「ど」の本来的な用法に近いもののようにも思われるものである。ただ、近世の「ど」と現代名古屋の「デラ」とでは年代が離れており、ストレートに結び付けるには問題があるかもしれない。今後もう少し時間をかけて検討してみたいと考えている。

この「デラ」という形の他、「デーレー」というように発音されて使われる場合もある。こちらの方は「デラ」よりは「どえらい」に近い発音だと思われ、「ドエラ」という形が変化したと思われる。「デラ」とは違い、「ドエライ」の形のものが変化したものだと考えられる。

「デラ、デーレー」などといった用法は、名古屋ではひんばんに耳にするもので、大阪人が「どえらい」を使う回数よりはるかに多いように感じられるものである。

なお、「デーレー」といった言い方は、中国地方の岡山県あたりでは使うとされるものである。近畿地方でも中国地方よりの兵庫県でも「デーレー」に近い発音の言い方がされると聞いた。ただこの場合、名古屋のように中立的に使われるかどうかはわからない。が、語形の面に限って言えば、「デラ、デーレー」というような言い方が、名古屋の他に、岡山県、あるいは兵庫県でも、京都・大阪あたりから見て周辺部に位置するということになる所に存在する、とまとめることが出来るかもしれない。今後さらに検討してみたい。

## 五・終わりに・現代の名古屋にみる「えらい」とそれに関係する語について

「えらい」という語は現代では、関西で用いられる以上に、名古屋では多用される面もあるように感じられることがある。例えば、関西でだと「ちよつと仕事がしんどい」というように「しんどい」を使いそうな場面でも、名古屋では、まず「しんどい」は使わず、「エライ」のみが使われているように感じる。関西でも「仕事のエライ」という場合はあるが、「しんどい」が使われる分、名古屋に比べると「えらい」が使われる頻度は少し低い、という印象を私は受けている。

また、「えらい」の用法として次のようなものもある。「えらい様」という用法であるが、各種の名古屋方言辞典等で立項されているものである。一例として山田秋衛編著「随筆名古屋言葉辞典」（昭和36年、泰文堂）を見ると、次のような例文が挙げられている。

○うちの会社のエライサマがいわつせることだで仕方がない

この「えらいさま」だが、三遊亭円丈の「雁道」（1987年、海越出版社）という本には、

○名古屋でいうえらいさまとは、たいして偉くなく、全く偉くないとは言えない程度しか偉くない人のコトを「えらいさま」と言つ。

というような記述がされており、微妙なニュアンスが名古屋人以外にはなかなか捉え難い所もあるようである。もつとも、関西でも「エライサン」という言い方はあり、それに近いかもしれないが。

この言葉は、名古屋の中年以上の方だと、あまり全国共通語では用いられない言い方とは意識しないで「えらい様にとるがや」などと日常よく使う言い方の方である。(全国共通語として普通に「エライサマ」ないし「エライサン」を使うのであれば、むしろこちらの考え違いということになるが)。

この他、先に挙げた洒落本の「駄客娼せん」という作品で、客の名前として「えら松」という言葉が出てくる。この言葉は「横着者」といった意味のようだが、現代の名古屋方言でも「エラマツ」は、「えらい様」と同様の意味で用いられるとされるものである。

以上、「えらい」は近世から現代に至るまで名古屋では非常によく使われる言葉であり、現代ではある種関西以上に用いられるとも見られること、また、「デラ」などを「どえらい」系の言葉だと認めるとすると、「どえらい」も近世から現代まで、名古屋で大変よく使われる言葉であることを見てきた。

一方、関西と名古屋の文化と言葉の関係の近さについては、いまさら言うまでもない位のものであるが、今回取り上げた形容詞「えらい」と「どえらい」についても、改めて関西と名古屋の関係の近さを再確認することになったようにも思われるものである。

#### 注

- 1 本稿は、拙稿「形容詞へえらいへどえらい」から見る近世後期上方語と名古屋方言(遠藤好英編「語から文章へ」所収、2000年)で扱った内容に検討を加えたものを中心としている。
- 2 寛政期までについては拙稿「形容詞へえらい」の出自と意味の変遷(『文芸研究』117、1988年)、「近世後期における形容詞へきつい」の意味・用法とその勢力について(『淑徳国文』31、1989年)、「形容詞へえらい」の勢力拡大過程(『淑

- 「徳国文」32、1991年）等参照。
- 3 江戸洒落本については、拙稿「十九世紀初頭江戸洒落本の資料性」（加藤正信編『日本語の歴史地理構造』所収、明治書院、1997年）、「江戸末期洒落本の資料性について」（『国語語彙史の研究』17、1998年）等参照。
- 4 名古屋の洒落本については、注1と注2で挙げた拙稿のほか、拙稿「近世後期上方語研究の課題——近世後期名古屋方言を視野において——」（『淑徳国文』35、1994年）でも触れている。
- 5 「膝栗毛」の口語資料としての問題点については、中村幸彦氏が「近世語彙の資料について」（『国語学』87、昭和46年）で触れているが、ここでは一九が「どえらい」という語をどう捉えていたか、だけを問題にすることにしている。実際の言語使用実態の検討は洒落本を中心に行う。
- 6 道行朋臣「接頭辞へど——」の史的考察」（『花園大学国文学論究』25、1997年12月）。
- 7 注2の拙稿参照。